

新刊紹介

中田知生 著『高齢期における社会的ネットワーク
——ソーシャル・サポートと社会的孤立の構造と変動』
(明石書店, 2020年)

齊藤 知洋*

本書は、高齢者の社会的ネットワークの存在や様相、およびソーシャル・サポートの授受を促進/阻害する諸要因について、社会調査データに対する統計解析をもとに論じたものである。日本は他の先進国に類を見ない長寿大国であり、近い将来には高齢者数が総人口の3割を超える勢いである。個人のライフコースから見れば、それは高齢期の長期化を意味する。退職や介護、配偶者との死別をはじめとする社会的役割の変化が著しい高齢期を送るうえで、個人を取り巻く他者との人間関係(社会的ネットワーク)は重要な要素であろう。

本書の議論は、序論(第1章)を含めて全10章から構成される。第2章では、分析枠組みの中核的な概念である「ソーシャル・サポート」について老年学・社会学理論に依拠しながら整理している。ソーシャル・サポートは、構造的側面(社会的ネットワーク、個人間関係などの社会的紐帯の規模やその様相)と機能的側面(当事者に対する影響)を持ち、後者はさらに情緒的サポート(賞賛・共感・助言・会話など)と道具的サポート(日常生活の手助け・金銭の提供・介護など)に細分化される。以降の章では、それらを前提に仮説検証がなされる。

数ある関連書籍と異なり、本書はパネルデータ(縦断的データ)を活用した統計解析を軸として議論を展開している点が大きな特徴である。老年学の諸理論(離脱理論や活動理論・継続性理論など)は、社会的役割やネットワークに対する加齢という生物学的発達の影響について注目したもの

である。にもかかわらず、多くの先行研究は一時点の横断的データを用いて異なる年齢階層同士を比較し、その差異をもって加齢効果を推定してきた(2章)。その点で同一個体の経時的変化を捕捉するパネルデータは、老年学理論から導出される仮説をより直接的に検証するうえで有用だと評価できる。本書の実証分析もハイブリッドモデル(3・9章)、集団軌跡モデル(4章)、系列分析(5章)、離散時間ロジットモデル(6章)などパネルデータの特性を応用した統計手法を採用している。

第3~9章では、個人・家族・地域・国家など複数の分析水準を設定し、加齢とソーシャル・サポートの関連について興味深い知見が示されている。その一部を列挙すると、年を取ると他者からの道具的サポートは減少する一方で、情緒的サポートは大きく変化しない(3章)。女性においては、加齢とともにソーシャル・サポートの供給元が友人や隣人から子どもへと次第に移行してゆくが、男性は老後一貫して配偶者を重要な他者とみなしている(5章)。また、道具的サポートは親子間の距離が長いほど子からの供給量が減少する一方で、情緒的サポートの提供量は親の地域交流に関する子どもの認知によって異なるという(7章)。社会的ネットワークの規模に関しては、高齢者の多くは加齢によって友人数の大幅な変化を経験するわけではなく(4章)、配偶者の喪失は男女ともに友人数や加盟組織数の減少に影響を与えていない(6章)。さらに、健康状態の悪化は特に

* 国立社会保障・人口問題研究所社会保障基礎理論研究部 研究員

男性の心理的孤独感を高め、社会関係の断絶（＝孤立）をもたらしやすいことが明らかとなった（9章）。

最後に、第10章では本書の知見を要約したうえで、今後の高齢者研究の展望が言及されている。分析全体を見渡すと、介護保険制度の普及に代表される「ケアの社会化」が一定程度進んだ現在においても、日本の高齢者は親族を中心とするインフォーマル・サポートを主たる拠り所とし、その変化に乏しいことが本書から浮き彫りとなったように思える。見方を変えれば、それは親族サポー

トの利用可能性が著しく低く、今後増加すると予想される配偶者や子どもをもたない未婚・無子高齢者の生活支援策をいかに構築するかが社会保障上の大きな課題となることを示唆する。

本書は、将来的に「人生100年時代」を迎えるであろう日本社会で高齢期を「幸せな老後（successful aging）」として過ごすためにいかなる社会設計や地域づくりが望ましいのか、このような事柄に関心を持つ幅広い世代に読まれるべき一冊である。

（さいとう・ともひろ）